

地域連携・フロンティアセンター

2020（令和2）年度実績報告

目次

I. 目的と運営	1
A. 目的.....	1
B. 組織図.....	2
II. 事業	3
A. 地域連携部門委員会	3
1. 公開講座	3
2. 広尾中学校模擬授業	4
3. ホームカミング・デー	4
4. 出張暮らしの保健室	4
B. 災害看護部門委員会	5
1. 武蔵野地域防災活動	5
2. 日赤広尾防災プロジェクト	5
3. なみえプロジェクト	6
4. 和歌山県湯浅町学校防災プロジェクト.....	7
C. 継続教育部門委員会	9
1. セミナー部会	9
2. 実習指導者研修会	10
D. 実践研究部門委員会.....	11
1. 赤十字リサーチフェスタ	11
付録	
ケアリング・フロンティア広尾 プロジェクト.....	12

I. 目的と運営

A. 目的

日本赤十字看護大学地域連携・フロンティアセンター（以下、フロンティアセンターという）は、日本赤十字看護大学が、これまでの知的・実践的な活動をもとに、人々に求められる看護を追究し、開かれた大学をめざして平成17年8月に開設された看護実践・教育・研究フロンティアセンターを前身としている。

斬新な発想で創造的な活動を行う必要があるという認識のもとにスタートし、10年目を迎えた平成27年度には地域連携の推進をその活動の中心的役割を担うことを目的に加え、本学が掲げる地域連携ポリシーのもと、地域連携・フロンティアセンターとして再び新たに出発した。

平成29年度4月に地域連携委員会とフロンティアセンター運営委員会が統合され、地域連携・フロンティアセンター運営委員会という組織とされた。同時に本学の地域社会連携ポリシーは地域社会連携、産官学連携が強調され、組織、機能に関する規定も下記のとおり改正された。

本センターは、建学の精神である人道に基づき、地域住民の健康と福祉に資することを目的に、以下の機能を果たすこととする。

- (1) 多様化する地域社会の中で、求められるニーズに対応しつつ、新しい看護活動の実践を推進する。
- (2) 看護実践の研究活動を通し、その知見を学内外に発信する。
- (3) 看護大学としての教育機能を、国内外の社会に貢献する資源として活用する。
- (4) 開かれたフロンティアセンターとして、臨床看護実践者をはじめ学外の研究者等と協働する場を提供する。

B. 組織運営（図1）

フロンティアセンターの活動は、①地域連携部門として、公開講座、広尾中学校の模擬授業、ホームカミング・デー、都営住宅での出張暮らしの保健室、②災害看護部門として、武蔵野地域防災セミナー、なみえプロジェクト、広尾地区防災連携活動、③継続教育部門として、フロンティアセミナー部会、認定スキルアップセミナー部会、実習指導者研修部会、④実践研究部門として、実践と教育との連携で実施するリサーチ・フェスタの活動がある。

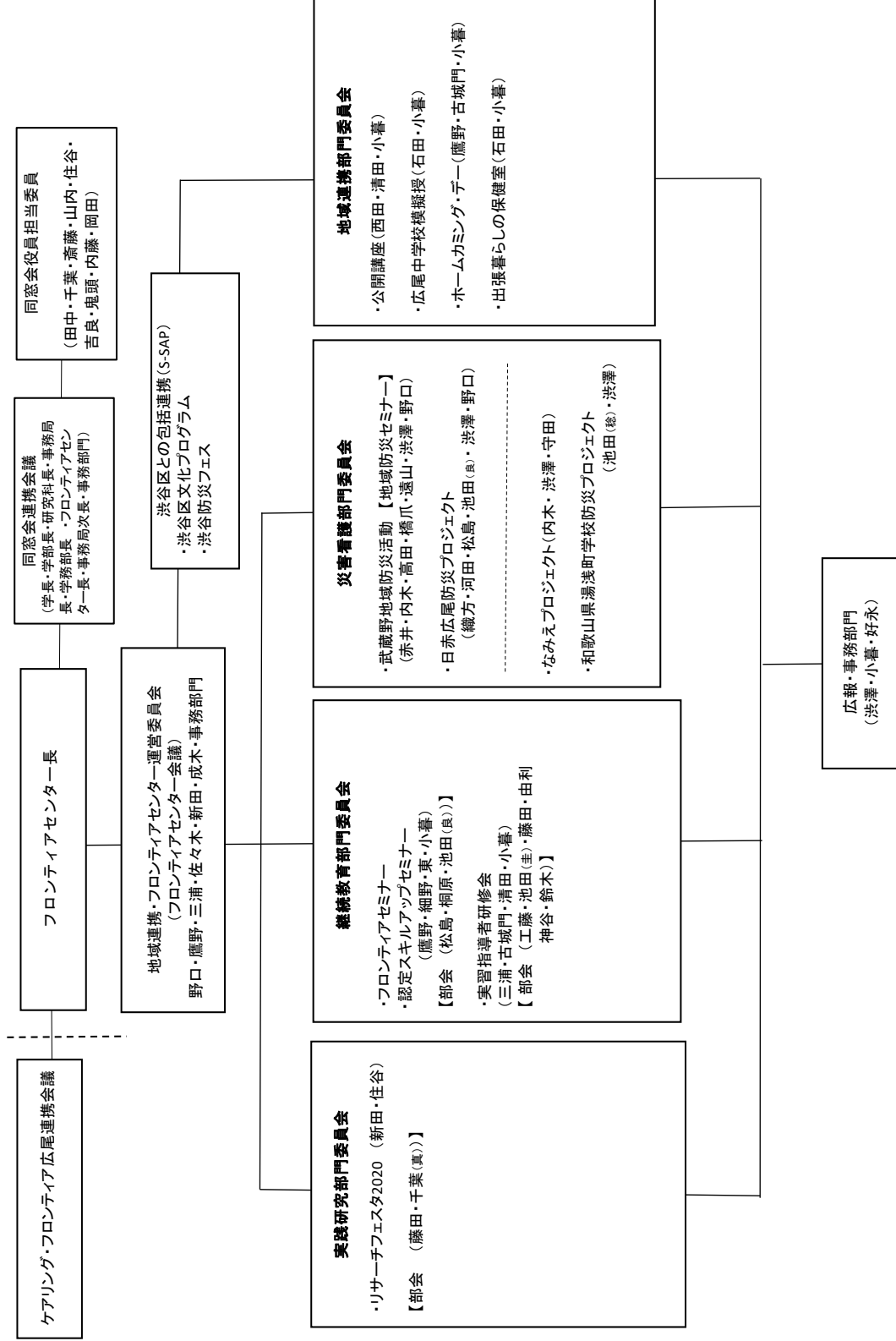
フロンティアセンターの運営は、地域連携・フロンティアセンター運営委員会で検討する。令和2年度、運営委員会は4回開催し、①年間計画及び会計・予算、②各事業の運営等について検討、共有した。運営に関わる財源は、原則として自主財源である。フロンティアセンター専従の職員は雇用せず、事務局が兼担している。各事業実施にあたっては、学内の教職員、災害看護ボランティアの看護学部学生や大学院学生をはじめ、これまでの事業に参加いただいている方や本学大学院修了生など幅広い力を得て運営した。

平成25年度に開始した広尾地区の保健医療福祉・教育が一体となってケアを創造するシステムとしての「ケアリング・フロンティア広尾」は、日本赤十字社医療センター、日本赤十字社総合福祉センター、日本赤十字社助産師学校、日本赤十字社医療センター附属乳児院等と協働の独立した組織として各プロジェクトの進捗を共有している。

令和2年度は、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、事業のほとんどは延期や中止となったが、今後も地域社会との連携の一層の強化をめざした活動を推進していく予定である。

図1 2020(令和2)年度 日本赤十字看護大学 地域連携・フロンティアセンター組織図

2020年6月4日



Ⅱ. 事業

A. 地域連携部門委員会

1. 公開講座

a. 趣旨

公開講座では、一般公衆の保健福祉看護に関する知識の向上を図るため、平成9年度から一般の方を対象に開催をしている。相互に研鑽し合えるような住民参加型の公開講座を目指し、これまでも参加された方々からは、時代のニーズに即し生活に活かせる内容であったとの意見も頂いている。現在は教員の教育研究成果を社会に還元し、高齢者向けの生涯学習支援として開講しており、多くの高齢者の方に参加いただいている。

b. 活動内容

今年度は、「備える -災害大国で健康に暮らすために-」というテーマで3名の講師に依頼し、準備をしてきたが、新型コロナウイルスの感染症拡大により、開催中止となった。そのため、令和3年度に向けて、web開催も視野に入れたプログラムを検討してきた。

c. 来年度の課題と展望

来年度は、新型コロナウイルス感染症の収束が見込まれないこともふまえて、対面での講義とweb開催の講義と両側面で準備を進めていくようにする。

2. 広尾中学校模擬授業

a. 趣旨

2014（平成26）年度より、本学と同じ区内にある広尾中学校の要請を受け、中学校の科目である「総合的な学習の時間」のうち1年生を対象にした福祉教育に位置付けられる学習の一部として、本学の強みを生かした体験学習を提供することを目的としている。

b. 活動内容

今年度も活動休止。

c. 来年度の課題と展望

中学校側からの要請が大学側の実施時期等とマッチングしないため、当面の間様子を見ることとして、活動を休止。

3. ホームカミング・デー

a. 趣旨

本学卒業生・修了生を対象として交流の場や学びの機会を提供することを目的として年1回開催する。

b. 活動内容

新型コロナウイルス感染症拡大防止により、開催を見合わせた。

c. 今後の課題と展望

次年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、卒業式が挙行されなかった令和元年度学部卒業生を対象者に開催する予定である。

開催方法については、新型コロナウイルス感染症の状況により検討する。

4. 出張暮らしの保健室

a. 趣旨

災害看護部門委員会の日赤広尾防災プロジェクト事業活動の一つとして、都営渋谷東2丁目アパートにおいて防災関係の出張講座を行った際のアンケート結果から、参加者は高齢者が多く、健康相談に関するニーズが高かったことから、地域連携部門委員会試しのプログラムとして、同住宅の住民を対象に出張保健室を開設した。

b. 活動内容

都営渋谷東2丁目アパートの参加対象者は高齢者が多く、今年度は新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため活動を自粛した。

c. 来年度の課題と展望

来年度も新型コロナウイルス感染症拡大の影響が予想されることから、都営渋谷東2丁目の集会室と大学をリモートでつないだ形で開催する方向を探る。

B. 災害看護部門委員会

1. 武蔵野地域防災活動

a. 趣旨

武蔵野地域防災活動は、本学前身の日本赤十字武蔵野短期大学時代の2004(平成16)年より始まった。2020(令和2)年で18年目になる。

武蔵野キャンパスを中心に武蔵野地域防災活動ネットワーク(通称 COSMOS コスモス); Community's Safety with Musashino Original Seminar; 主に武蔵野市境南町の自主防災組織、地域企業社員、大学教員有志等)と武蔵野市民防災協会、行政、日赤看護大学教員、日赤看護大学生サークル(SKV)と協働し防災セミナーを開催し、地域の人々と共に、「身近な防災の知恵と技を獲得し、一人ひとりが災害に強くなる人材育成」を目的としている。武蔵野地域防災セミナーでは、「官」「民」「学」が一体となって地域防災活動に取り組んでいる。

b. 活動内容

例年は、武蔵野市の地域防災セミナーの企画会議を毎月武蔵野キャンパスまたは広尾キャンパスで行っている。セミナーは10月から月に1回(土曜日:午前・午後の計2回のセミナー)年間12回、武蔵野市役所で開催され、各回の参加者数は30~50名程度である。大学側は、講座プログラムの考案やSKVとの連絡調整、セミナー当日の準備や片付けなどを行っている。セミナー開催に伴う運営経費は、本学と武蔵野市が半々で拠出している。

今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大により対面で行う防災セミナーは中止とした。

その代替として、本学、国際・災害看護学専攻の大学院生と武蔵野市、Cosmosのメンバーと協議を重ね、共同プログラムとして大学院生の授業の一環ではあるが、防災に関する知識について、2021(令和3)年3月26日にインターネット上の動画配信ツールを使って配信を行った。

c. 来年度の課題と展望

来年度も新型コロナウイルス感染症拡大が懸念されるため、今年度同様に動画配信など、対面でのセミナー以外の方法での人材育成や地域防災の普及活動をおこなっていく必要がある。併せてSKVにも活動の場が提供できるようにしていく。

2. 日赤広尾防災プロジェクト

a. 趣旨

プロジェクトの目標は、広尾地区の日赤6施設(看護大・医療センター・総合福祉センター・乳児院・助産師学校・幹部看護師研修センター)の連携と各施設の防災機能の強化と人材育成、災害時のスムーズな連携を目的とする。さらに行政・医師会・住民組織等を巻き込み、広尾地区における防災連携範囲を広げることであった。

b. 活動内容

(1) プロジェクトメンバー

日本赤十字看護大学(○織方・野口・河田・松島・池田良・渋澤);日本赤十字社(武口);日本赤十字社医療センター(丸山・ソルステインソン・佐藤・高木);総合福祉センター(染谷・岡本・清水);

乳児院（臼井・福澤）；日本赤十字社幹部看護師研修センター（大和田・瀬川・江尻・三好）；渋谷区医師会（高橋・渡辺）；日本赤十字社東京都支部（齊藤）；渋谷区（山口）の24名で活動を行った。

（2）活動内容

今年度は新型コロナウイルス感染症拡大により5月・11月の氷川地区合同防災訓練、広尾中学校防災授業、心和会地区住民との地域連携イベントはすべて中止となった。

4月はオンラインイベント等の企画を行ったが、地域の自主防災会に確認したところ、メンバーは高齢であり、対面実施が可能になれば再開したいとのことであった。対面活動が可能となるまでは印刷物で防災通信等の発行を企画し、渋谷区HPにリンクを貼ってもらう等の発信を続けることとした。

c. 来年度の課題と展望

対面開催が困難な場合の情報発信方法が課題である。

対面が可能となった場合には渋谷区地域住民ニーズの確認の課題は、新会長・副会長から「出前講座」や「健康と防災を含む話題」について具体的に実現を目指す必要がある。

3. なみえプロジェクト

a. 趣旨

2013（平成25）年に日本赤十字看護大学は日本赤十字社と共に、福島県いわき市区域に所在する東京電力福島第一原発周辺町村住民への支援のための活動を検討し、その過程で浪江町から要請があり、支援を開始した。当時、浪江町は保健師確保に苦慮しており、いわき市の避難者の住まいが借り上げ住宅居住であったため安否健康状態の把握が難しいという問題を抱えていた。そこで、2013（平成25）年10月より、日本赤十字社（本社）、浪江町から資金の提供を受け、本社看護部と共同で支援を開始した。2017（平成29）年3月で日本赤十字社からの資金提供が終了した。同年4月から浪江町と契約を結び、大学単独のプロジェクトとして実施している。

目的は、いわき市に避難した全浪江町民を対象として、健康と安否を確認し、関連組織と情報共有をして、問題を抱える人達の抽出と必要な支援へとつなげることである。

b. 活動内容

本プロジェクトでは、町民の生活や経験に耳を傾け、ナラティブ・アプローチに基づく「語りを聞くケア」の実践を行いながら、安否や健康状態の確認を行っている。これらの情報を被災者に関連する組織（浪江町、県保健所、心のケアセンター）と情報交換を定期的な会議で行いながら連携をとり、必要な援助に結びつけている。支援を通し、問題を抱えて生きる被災者が相談し、また方策を検討できるよう図っている。

いわき市内に日赤浪江保健室を設置し、非常勤職員を4～5名雇用しており、3名/1日で活動を行っている。2020（令和2）年度は、940世帯について家庭訪問、電話での状況聴取を実施した。また、復興住宅も訪問した。

2020（令和2）年度 調査数と訪問理由

訪問の形態	世帯数	種別													延人数
		1、高齢者	2、乳幼児・児童(小児)	3、妊産婦	4、身体障がい	5、知的障がい	6、精神障がい	7、生活習慣病	8、感染症	9、成人	10、その他	11、その他(心のケア関係)	12、栄養・食生活	13、歯科・口腔	
家庭訪問	140	70	6	0	3	0	1	0	0	66	0	0	0	0	146
電話	776	287	13	1	1	0	2	5	0	466	0	6	0	781	
復興住宅のみ	24	13	0	0	0	0	0	1	0	10	0	0	0	24	
合計	940	370	19	1	4	0	3	6	0	542	0	6	0	951	

c. 来年度の課題と展望

2021（令和3）年度をもって本事業は終了となる。現在の活動は、県保健所、心のケアセンター、生活支援員等に引き継がれる。

4. 和歌山県湯浅町学校防災プロジェクト

a. 趣旨

湯浅町・教育委員会、早稲田大学人間科学学術院、本学の協定書を締結して4年目になる。3者間で本年度もメールによる意見交換等を行い、よい関係性を構築できている。

b. 活動内容

本年度は残念ながら開催されなかった「湯浅町 防災フェスタ」への参加は、特に、SKV や DNGL 学生の防災教育の企画運営及びファシリテーションの良い機会ともなる。さらに、防災に地域ぐるみで取り組む地域防災力への支援方法を学ぶ良い機会ともなる為、次年度も機会があれば継続を考えている。

本年度の湯浅中学校の出張講義は、対象者が中学1年生ということもあり、遠隔のみでは十分な学習効果を期待できないと判断した。昨年度は湯浅中学校の先生方の全面的な協力があり、十分な事前打ち合わせによる関係性の構築のもと本番を迎えたからこそその成果が得られたと考える。対象のレディネスのみではなく、中学校の先生方との打ち合わせの不十分さも障壁となり、本年度は見送らざるを得ない状況であった。

c. 来年度の課題と展望

2020（令和2）年度は、感染症蔓延委より、2019（令和元）年度開催した活動を中止せざるを得ない状況であった。今後、今年のような感染症の蔓延で遠方への移動が困難である場合、東京都と和歌山県湯浅町という距離的問題をクリアする必要性が求められる。以下の①②に関しては、本年度同様、感染症の経過を追って、計画修正をする。

①毎年恒例の「湯浅町 防災フェスタ」への参加の検討

防災フェスタ実施にあたり、学生の学びが促進されるよう、学生間や湯浅町との事前打ち合わせを充実させる。

②湯浅中学校出張講義第2弾の検討

湯浅中学校では1年生に対して毎年総合学習の時間で防災教育を行っている。2021（令和3）年度の授業計画に沿って、協力要請に応じていく。

コンタクトパーソン（次年度、担当者変更を鑑みて記載）

湯浅町：湯浅町教育委員会 学校教育係 指導主事 鳥羽雅士 E-mail: sidou2@yuasa.jp

☞ 防災フェスタ及び湯浅中学校教員との仲介者

早稲田大学：早稲田大学 人間科学学術院 教授 浅田匡 E-mail: asada@waseda.jp

☞ 湯浅町・本学・早稲田大学の共同研究（人総研）「防災教育プログラム開発」の代表者

C. 継続教育部門委員会

1. セミナー部会（2019年度フロンティアセミナー部会と認定スキルアップセミナー部会が統合）

a. 趣旨

本部会は、①本学の教育的機能を活用した人材育成、病院との協働、臨床実践能力の向上を目指し、タイムリーな発信を行う場と位置づけられている「フロンティアセミナー」、②本学の認定看護師教育課程修了生のフォローアップを主目的としている「認定看護師のためのスキルアップセミナー（以下、スキルアップセミナー）」の企画、運営を担う。

b. 活動内容

例年、「フロンティアセミナー」「スキルアップセミナー」は年度内に各1回ずつ開催しているが、本年度はコロナ禍で開催延期となった2019（令和元）年度の「スキルアップセミナー」のプログラムも加え、通常は対面式で行うセミナーであるが全てWebを活用したライブ配信で開催した。

今年度で開催したセミナーの概況は、以下に示す通りである。

1. フロンティアセミナー：2020（令和2）年11月7日開催，参加者60名
「チャレンジ看護研究！私でもできる、質的研究」
講師：遠藤公久先生（本学教授）
2. 認定看護師のためのスキルアップセミナー（2019（令和元）年度プログラム）
：2020（令和2）年10月10日開催，参加者122名
「認定看護師に求められる教育力」講師：佐々木幾美先生（本学教授、学部長）
「あらためて看護の初心を ～多職種から考える看護の独自性～」
講師：本間之夫先生（日本赤十字医療センター院長）
川嶋みどり先生（本学名誉教授）
3. 2020（令和2）年度認定看護師のためのスキルアップセミナー
：2021（令和3）年2月27日開催，参加者165名
【“知ろう”“備えよう”—新型コロナウイルス感染症禍の看護—】
「災害時の要配慮者とCOVID-19」
講師：内木美恵先生（本学准教授）
「医療職種のメンタルヘルス」
講師：杉原玄一先生（東京医科歯科大学准教授）
武井麻子先生（本学名誉教授）

c. 来年度の課題と展望

2021（令和3）年度は、‘ケアリング’をテーマとして、「フロンティアセミナー」と「スキルアップセミナー」の両セミナーを重層構造とした1つのプログラムで開催することを2020（令和2）年度から企画している。

開催は、2021（令和3）年10～11月頃、本年度同様にWebを活用したライブ配信を予定している。

3. 実習指導者研修会

a. 趣旨

本研修会は、本センターの研修部門に位置付く実習指導者研修部会を構成する教員 11 名（学内企画委員）が中心となり、学外企画委員として日本赤十字社医療センター、武蔵野赤十字病院、大森赤十字病院、葛飾赤十字産院、横浜市立みなと赤十字病院に所属する看護職者（各施設 1 名、合計 5 名）と共同で企画・運営している。約 7 か月間にわたる、講義・演習を組み合わせた実践的なプログラムで、これまで参加者の方々から好評をいただいている。下記の目的、運営方針をもとに行っている。

【目的】

- (1) 本学での看護学教育における実習の意義および実習指導者としての役割を理解し、効果的な実習指導につなげる。
- (2) 大学教員や自施設以外の実習指導者との情報交換の場とし、看護者としての視野を広げ自己成長の機会とする。
- (3) 実習での「ケアし、ケアされる」という体験を通して、学生が 4 年間にわたり成長していけるような指導体積を構築する。

【運営の基本方針】

- (1) 本学と実習施設が協働し、企画運営を行う。
- (2) 受講生が、本学教員や自施設以外に勤務する受講生と情報交換できる場を提供する。
- (3) 受講生が‘人を育てる’観を育める場を提供する。
- (4) 受講生には、研修修了時に「日本赤十字看護大学 実習指導者研修会 修了証」を発行する。

b. 活動内容

本年度は新型コロナウイルスの流行と医療提供体制のひっ迫もあり、開催中止となった。令和3年度の開催に向けて年2回（10月および1月）の企画会議をWEBで行い、新たな実習指導者研修会のあり方、次年度の研修会開催に向けた、プログラムや方法の検討などを行った。

c. 来年度の課題と展望

2021（令和3）年度は、WEBでの開催を予定している。今まで対面での多くのグループワークを取り入れたプログラムであり、この点が研修生からも高い評価を得ていた。WEBでの開催となるため、WEB上での効果的なグループワークになるような準備・運営や、WEBでの開催の伴う研修生への情報セキュリティガイダンスを行う必要がある点が課題である。

D. 実践研究部門委員会

1. 赤十字リサーチフェスタ

a. 趣旨

赤十字リサーチ・フェスタは、赤十字系列の医療・福祉施設を中心に連携し、研究や教育の質を高め、より良い実践を行っていくことを目指す。

b. 活動内容

2021（令和3）年1月29日（月）17時30分～19時30分に赤十字リサーチ・フェスタを開催した。今年度は新型コロナウイルス感染症拡大を受けて、オンライン（ZOOM）を用いて実施した。そのため、プログラムとしては例年実施している研究ポスター掲示、リサーチカフェなど対面を前提とした内容は中止とし、日本赤十字社医療センター「冬の院内看護研究発表会」参加および日本赤十字看護大学教員による6演題の研究発表とミニレクチャー、研究相談を実施した。日本赤十字看護大学吉田みつ子教授が研究の講評や研究相談に応じた。

今年度のミニレクチャーは、日本赤十字看護大学本庄恵子教授を講師に迎え、長期的に臨床と大学とで共同シケアを開発した「理念を実践にいかすセルフケア支援の普及：病院と大学のco-creativeな取り組み」が紹介された。

当日の参加者は、日本赤十字社医療センター、日本赤十字看護大学などから、看護職、教員、大学院生など100名であった。

今回はオンライン開催のため、例年のように複数のプログラムを自由に回って参加することはできず、研究発表について研究者と対面で交流することはできなかったが、オンライン発表内容についてチャット機能を用いて質疑応答を行うという方法で対応した。そのため、開催の目的である参加者の交流や連携を促進するプログラムの展開は課題となった。一方で、オンライン開催により、勤務後の時間帯であっても、時短勤務や育休中であっても参加が容易となった。

c. 来年度の課題と展望

次年度に向けては、引き続き日本赤十字社医療センターと日本赤十字看護大学との共催で連携を強化すること、新型コロナウイルス感染症拡大の影響が予測される中で、できるだけ参加者同士が交流できるプログラムの工夫・展開を検討することが課題である。

付録

ケアリング・フロンティア広尾プロジェクト

2020（令和2）年度 報告書

プロジェクト名	高齢者看護コース：急性期病院における認知障害のある高齢者の看護																								
リーダー	坂口 千鶴																								
メンバー	千葉京子・清田明美・松島史絵・池田良輔子（看護大学老年看護学領域）（新型コロナウイルス感染拡大のため大学メンバーのみで実施）																								
会のねらい	急性期病院における認知障害のある高齢者に関わる看護師が、高齢者とその家族を看護する上で直面する倫理的課題について理解できるとともに、自らの看護実践を振り返り、看護実践上での倫理的な悩みを共有する中で、意思決定能力の向上を目指す。																								
今年度の報告（概要）	<p>平成26年度からの活動をもとに、令和2年の高齢者看護コースでは「急性期病院における認知障害のある高齢者の看護～高齢者の倫理的課題とその看護実践に焦点を当てて～」をテーマに、全5回のコースを、医療センター、広尾地区等の病院の看護師を対象に実施する予定であった。しかし、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、対面でのコースの実施は困難となり、急遽Zoomによる双方向オンラインで実施することに変更した。9月から募集期間を設けたが参加者が無かったため、さらに他の医療機関に募集を依頼し、計13名の参加者が得られた。11月より全5回のコースを実施し、コースの前後、コース終了後3ヶ月でアンケートを行った。</p> <p>表. 実施スケジュール</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>回</th> <th>月日</th> <th>方法</th> <th>内容</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1</td> <td>11月27日(金) 18時～19時半</td> <td>オンライン (Zoom)</td> <td>講演会：「急性期病院における認知障害のある高齢者ケアの倫理的課題」 講師：坂口千鶴</td> </tr> <tr> <td>2</td> <td>12月18日(金)</td> <td>オンライン (Zoom)</td> <td>事例検討①(グループワーク) ファシリテーター：千葉・清田・松島・池田・坂口</td> </tr> <tr> <td>3</td> <td>1月22日(金)</td> <td>オンライン (Zoom)</td> <td>事例検討②(グループワーク) ファシリテーター：千葉・清田・松島・池田・坂口</td> </tr> <tr> <td>4</td> <td>2月19日(金) 18時～19時半</td> <td>オンライン (Zoom)</td> <td>講演会：「急性期病院における認知障害のある高齢者ケアの倫理的課題 実践報告」 講師：藤原 麻由礼</td> </tr> <tr> <td>5</td> <td>3月12日(金) 18時～19時半</td> <td>オンライン (Zoom)</td> <td>事例発表③(グループワーク) ファシリテーター：千葉・清田・松島・池田・坂口</td> </tr> </tbody> </table>	回	月日	方法	内容	1	11月27日(金) 18時～19時半	オンライン (Zoom)	講演会：「急性期病院における認知障害のある高齢者ケアの倫理的課題」 講師：坂口千鶴	2	12月18日(金)	オンライン (Zoom)	事例検討①(グループワーク) ファシリテーター：千葉・清田・松島・池田・坂口	3	1月22日(金)	オンライン (Zoom)	事例検討②(グループワーク) ファシリテーター：千葉・清田・松島・池田・坂口	4	2月19日(金) 18時～19時半	オンライン (Zoom)	講演会：「急性期病院における認知障害のある高齢者ケアの倫理的課題 実践報告」 講師：藤原 麻由礼	5	3月12日(金) 18時～19時半	オンライン (Zoom)	事例発表③(グループワーク) ファシリテーター：千葉・清田・松島・池田・坂口
回	月日	方法	内容																						
1	11月27日(金) 18時～19時半	オンライン (Zoom)	講演会：「急性期病院における認知障害のある高齢者ケアの倫理的課題」 講師：坂口千鶴																						
2	12月18日(金)	オンライン (Zoom)	事例検討①(グループワーク) ファシリテーター：千葉・清田・松島・池田・坂口																						
3	1月22日(金)	オンライン (Zoom)	事例検討②(グループワーク) ファシリテーター：千葉・清田・松島・池田・坂口																						
4	2月19日(金) 18時～19時半	オンライン (Zoom)	講演会：「急性期病院における認知障害のある高齢者ケアの倫理的課題 実践報告」 講師：藤原 麻由礼																						
5	3月12日(金) 18時～19時半	オンライン (Zoom)	事例発表③(グループワーク) ファシリテーター：千葉・清田・松島・池田・坂口																						
次年度の予定（概要）	新型コロナウイルス感染拡大を考えると、来年度も対面でのコースを実施することは難しいと考えられるため、Zoomによる双方向オンラインで実施する予定である。参加を依頼する病院については、さらに拡大して遠距離の病院にも協力を依頼する予定である。																								

2020（令和2）年度 日本赤十字看護大学 地域連携・フロンティアセンター実績報告

作成年月 令和3年12月

発行 日本赤十字看護大学 地域連携・フロンティアセンター

編集 フロンティアセンター 広報・事務部門

〒150-0012 東京都渋谷区広尾 4-1-3

日本赤十字看護大学

電話：03-3409-0924

FAX：03-3409-0589
